
見える人

いちは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見える人

【Nコード】

N6916I

【作者名】

いちは

【あらすじ】

見えないものが見える男の回想録。

小さい頃から、聡い子だと言われていた。

四歳の時にはすでに聖書を暗記し、近所の老人たちに頼まれては諳んじた。

五歳で近所のパン屋の売り上げの計算を任され、お礼に一日一個の飴玉をもらった。

周囲の大人たちからは神童才子と褒められた。

七歳を過ぎた頃から、大人たちの私を見る目に変化を感じるようになった。

だんだんと、怯えのようなものが混じり始めた。

老人たちは私と目を合わせなくなった。

パン屋の仕事はやんわりと断られた。

私だけでなく、私の家族たちも、徐々に周囲から避けられるようになった。

八歳のあの日。

あの時、本当はすべて見えていた。

見えていたのに、そう言わなかったのは、周囲の空気を察したからだ。

見えてはいけない。

そういう気がした。

いや、むしろ。

見えていない、ということ公言した方が良いとさえ思った。

誰のためでもない。

自分のために。

だから私は、叫んだ。

精一杯に子どもらしい無邪気を装って。

「王様は、はだかだ!!」

周囲の大人たちのホツとした瞳。

「自分たちが王様に対して言えなかったことを、正直な子どもが大声で指摘してくれた」

そんな安堵？

ちがう。

そうじゃない。

「この子にも見えなかった」

そのことが、大人たちを安心させた。

大人たちは私を取り囲み、談笑した。

この子も普通の子なのだ、と。

そんな大人たちの隙間から見える王様は、

顔を血のように赤らめ、怒りで震えていた。

神秘的な、金色の服に身を包んで。

その日の夜は満月だった。

二人の布織職人が見た最後の満月。

翌日、二人のうちの弟子と称していた男は首をはねられた。

師と呼ばれていた男は裸にされ、二頭の馬で左右に引き裂かれた。

大人たちは、ある者は彼らを罵りながら、ある者は笑いながら、

彼ら二人の死に様を眺めていた。

私は、王様の着た美しい服が見えていたのに、見えないふりをした。そして、その判断のおかげで、私も、私の家族も、街の一員に戻れた。

老人たちは、また聖書を諳んじてくれと頼んでくるようになったし、パン屋の仕事も改めて頼まれるようになった。

私は喜んだふりをして聖書を語って聞かせ、

飴玉一個のご褒美に、子どもらしくはしゃいで見せた。

聖書を聞く老人に混ざって、自らの首を抱えた男が座っていた。パン屋の窓の向こうには、体の裂けた男が立っていた。私は、見えないふりをして生き、今や七十歳をこえた。

今こうして語っている間も、二人はそこで、私をただ無表情に見ている。

彼ら二人だけは知っているのだ。

私にだけは、見える、ということ。

恐怖？

彼らの亡霊につきまとわれて生きること、さして辛くはない。

私は見えないふりが得意だし、何より亡霊たちは無害なのだから。

ただ、街の愚か者たちに囲まれて生き続けなければならぬことが、苦しい。

内心で身悶えしながら、私はその有害な愚かさが見えないふりをし、愛想笑いを浮かべる。

こんな私をただただ見続けること。

それが、彼ら二人の復讐なのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6916i/>

見える人

2010年10月16日13時11分発行